

8  
2冊  
2516

乙六  
一本

東 京 大 学 書 館				
二	一	六	八	
冊	六	六	八	
	号	架	函	類

葬禮私考

027354-001-3

8-161

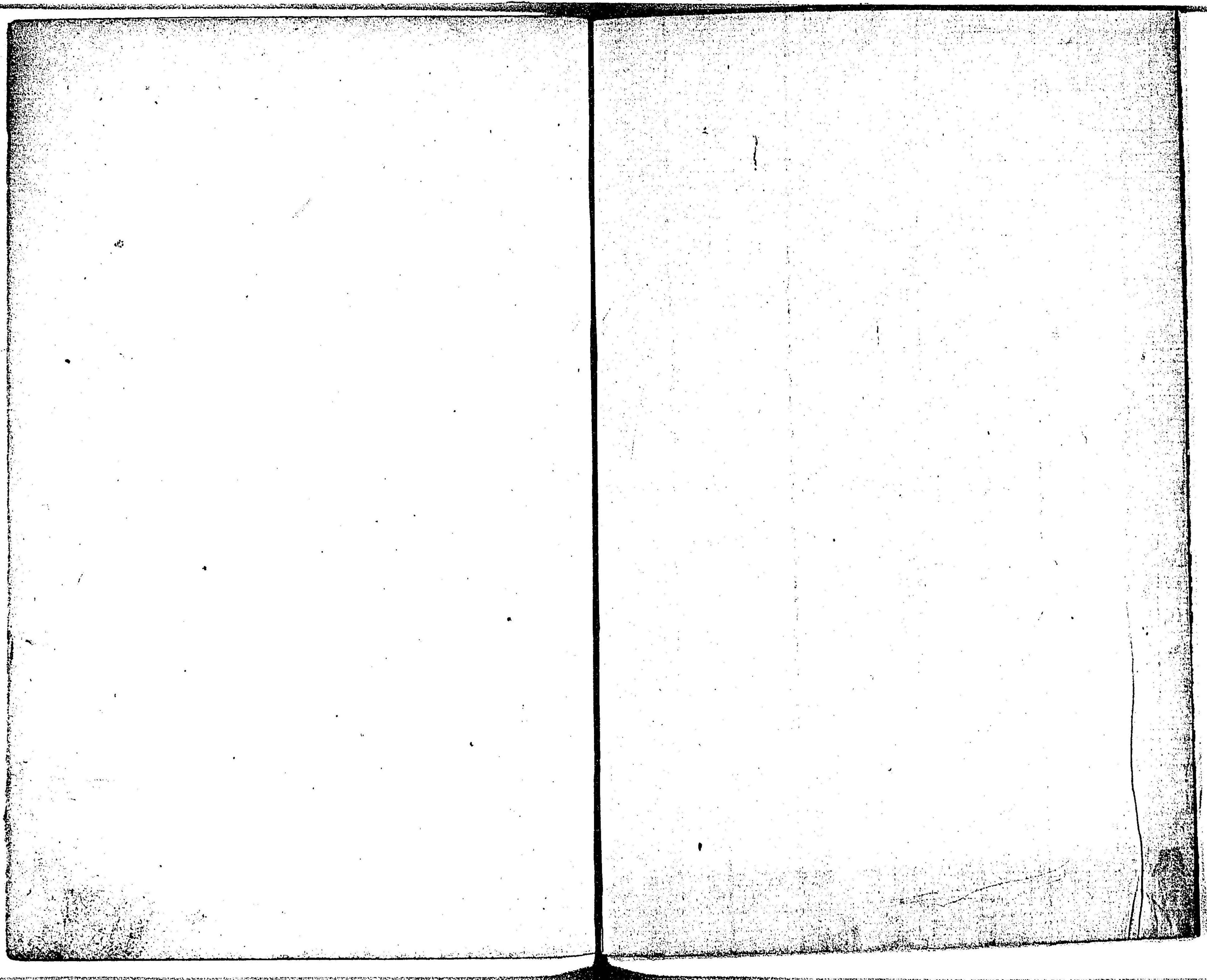
葬禮私考

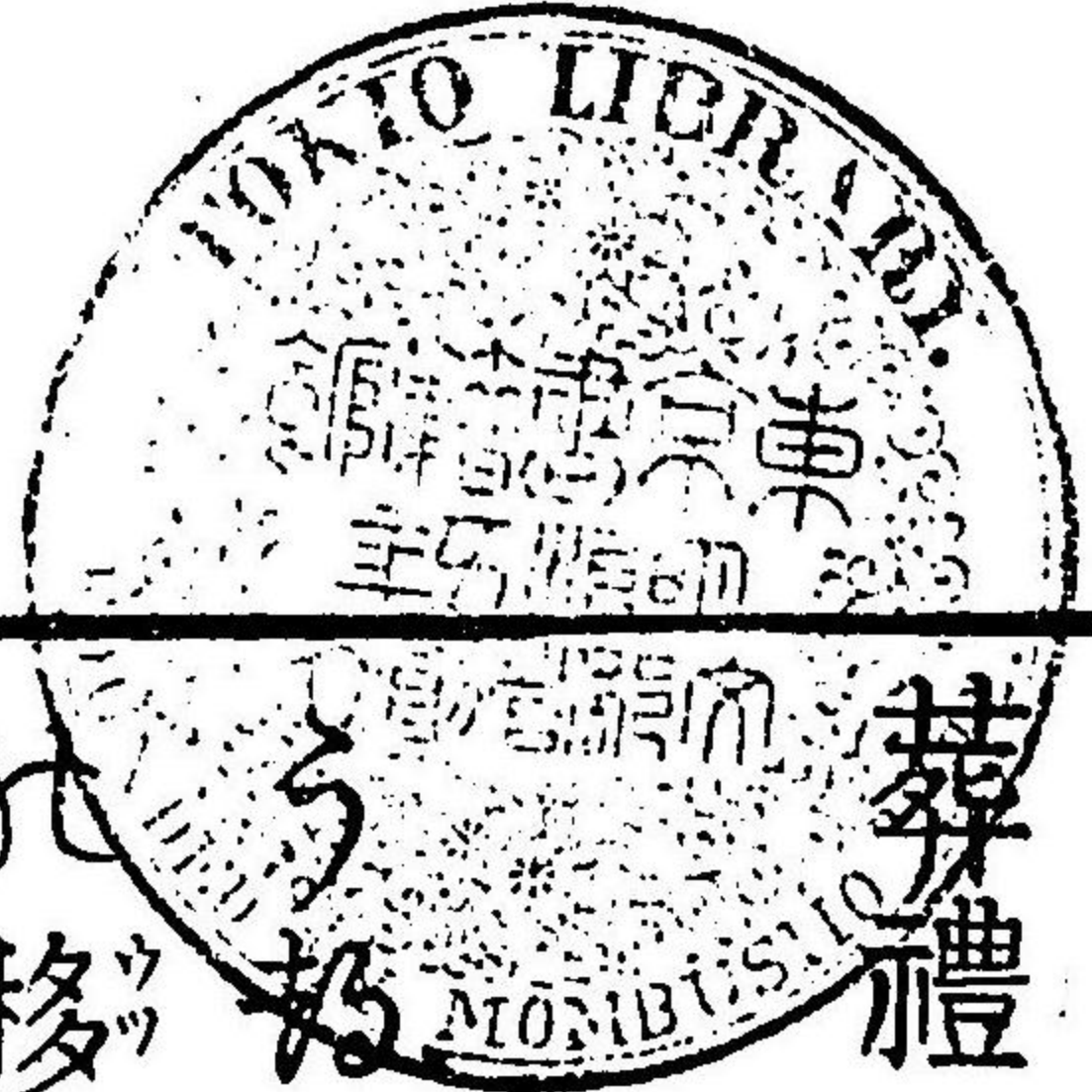
栗田 寛/著

M9

ADJ-0109







葬禮私考

常陸 栗田寛 著

明治十年圖書局發行

うねせとの世小在とあは。いけとと生る人。春秋  
れ移り替らふまよく。幼きお死を壯り小。壯は  
ぬるは老く。終小身失る事を。誰と此人の得まぬ  
かゝるき。故神祖の神は御世とゆ。其遺體を葬る  
法式を定めおのせ給ひけむ。

凡そ皇大御国の人民は心淳樸にして。君を尊  
み。父母を敬ひ。兄弟をたし。妻子を惠る。其  
朋友を睦まじふ。風俗殊小篤く。何とをきだ。其

死シカにぬる人故。もてあつらふ道も。備めてあむ有る。抑、其葬カフの禮レも。即チ神祖伊射奈岐大神イナギノオホカミに。神の御意ミコノコトを以て。其御世のやどをゆ。かゝる行ふは。制オキテ給ふ事著シき。中つ御代をゆ。穢キナまや佛氏ナカコに教ヲシを崇アガめ給ひとゆ。以降コノカミ我皇神アマガミに道衰オホす。人の心も偏ヒナり薄ウスらぎ。偽イツり多オホき風俗とあはにしり。まづての世は趣サカも替カゆとる。の中ナカに葬ハカの儀ノリをあとかよめ。あつたは行ユキお。専モトら僧徒カミカシモに掌シふ事ノ如クかれゆけ。近イデき頃トを以て。そは快ハヤからぬ事ノ思シふ人も出イデ

來キる。儒葬ズサマの云クも。西土モロコシの周世シウに禮レに従シふ。少オホの宜イし。如クも。其外トに。國クニの制オキテを以て。御國ミクニの禮レは。あらざ。依ヨをいかにせむ。こと。これ神代をゆ。定サたる。御儀ミギある事ノ知らざ。依ヨをゆ。也。若モレも。其禮レある事ノ知シ得エたらむ。は。今の現アツ小ス。天皇命スメラミコトの御ミも。むけ。依ヨを。御ミ惠メみ。被カぶるも。死シた。とて。異國トクニの禮法レを。據シり。行ユべき。理リある。法ホトも。あらば。あむ。

さきど上古イニシヘ。凡スベく人のこと。ろめ何ナニも。唯タダひろく

簡易なり々れむ。其法式と云も。後代の如委曲  
言痛くこそあらざりて多め。親とたき親しく。疎き  
を疎く。たのき卑かま。その形其わどく。小差別あ  
り。棺槨あどを作し設け。衣裳あど扱め縫ひ備  
ふ。又種々れ具字も。甚細もお終り心字盡し誠字  
致して。作し備ふる事あども有しおるべき。

棺を和名抄ふ所以盛屍也。和名比止岐。まど槨、  
周棺者也。和名於保士古とあり。此棺も槨も。共  
小上代より比登岐を云。又常小を紀とのみも  
云。書紀景行卷より棺槨。孝徳卷より棺槨。

まど棺あどあり。紀より奥津城あどれ城より屍  
を藏むる構を云。奥津城ハ。万葉より多く見え。人  
を葬せる処を云。天智紀より  
ハ。墓とあり。奥と。比登紀とあり。人屍扱納る。故  
小云。あり。さて素盞鳴尊の御言揚ふ據る。内、  
棺を上代より木以り造り。槨を古事記姓氏録  
小。石棺。天智紀より石槨。あどある時を。石以り造  
りしものなるべき。衣服あど扱め縫ひ備  
ふ。事より。史より見えた。ふとあどれど。既より棺を作  
り。又槨を設けて。屍を長より腐さしと思ふばあ  
り。厚き風俗あると合せて。衣冠をも著せ。

衾を蔽ふとい。いふまでめれく。さだるまる平  
常の事ある故。書に記されざりしものと  
見えぬ。但し書紀小造綿者と云官女あるを。  
若くハ其衣衾多造。糸料比官人小やあらむ。其  
宅御食人尸者。春女持傾頭者と云官ある時。  
種々れ具多造。設けし事も亦明らけし。  
故伊邪那岐命。其汝妹命の黄泉国。幸坐るを  
悲しみ。須世理毘賣命。其夫大穴持命。火焼し  
給ひぬ。疑ひ坐し時。喪具を持。哭初。來坐  
し。又天若日子。其妻。其喪多泣。悲とさ惑ひ。其

友ある味。高彦根神の吊坐せるさる。思ひやる  
る。神代とゆ。然る風俗あり。其禮儀め  
大らるに備え。

書紀 伊弉冉尊 小。伊弉諾尊恨之曰云云。則匍匐  
頭邊。匍匐脚邊。而哭泣流涕焉。まゝ古事記 天若  
日子。下照比賣之哭聲。與風響到天とあるを。  
眞の哀情を盡せる趣。西土人比喪。躡  
踊とて。心うち踊りて。悲哀し。又倚廬と云小  
居る時。哭にも晝夜時。葬て後。朝夕  
小一度。哭かど云禮をしめ。言痛くつくり

設けたるを。うべく。あげし聞ゆまど。眞の禮  
也。は云ふらば。凡加れしきも悲こて。甚も忍  
びが。と死時を。嬰兒の母を失へる。如聲放ち  
て泣もき。又悲しからぬ時を。必哭べき  
にも。何ら。事小觸き心も思慕とあま。夜晝  
朝夕に差別なく加。おむぞ。眞の哀ふ。何ゆ  
を。設令む。縁うちをどめ。た。眞の其心  
か。あらむ。要れ。徒事。故我古へ  
人。伊弉諾命。行ひませる。御禮のまふく  
もの。多。けむ。其。倭建命。崩る。時の

事。古事記。坐。倭后等。及御子等。諸下。到。而。作  
御陵。即。匍匐。迴。其地。之。那豆岐田。而。哭。爲。歌。曰。云  
云。又。押磐。皇子。殺。され。給。時。の。事。雄略  
卷。皇子。帳。内。佐。伯。部。賣。輪。更。各。抱。屍。駭。惋。不。解  
所。由。反。側。號。呼。往。還。頭。脚。と。ある。字。神代。の。故。實  
小。合。せ。も。然。思。え。る。れば。也。

大抵喪をぞ七日八日が間め。止免た。と見え。とめ。  
庶人の上。れ。事。もの。見え。ぎ。考。ふ。る。き  
由。な。れ。ど。臣。れ。列。ある。人。々。大。抵。加。し  
お。る。べ。し。古。事。記。天。若。日。小。日。八。日。夜。八。夜。以。遊

也。書紀ヨハ八日八夜ハヤヒハヤ天孫本紀ニ。饒速日尊ニ既カ啼哭悲歌ハとあり。夜ヨ天孫本紀ニ。饒速日尊ニ既カ也。神殞去矣ハ。中略ニ處其神屍骸カ。日七夜七ヨ以爲遊樂哀ニ泣於天上ニ歛竟矣ハ。日本靈異記ニ。栖輕卒也ハ。部カ。輕カ。天皇勅ニ。留ナ七日七夜ナ詠彼忠信ヲとある。如カく。上代ニ。七日七夜ニのわどカ。殊ニ。哀情ヲを盡スして。容易ク。疎ニ。小夫ノ。事ヲ。あかニ。ゆキ。志ヲ。あニ。ゆキ。尊ニ。きモ。卑キ。も。こ。ろ。七。日。八。日。グ。わ。ど。喪。ハ。留。め。と。こ。し。思。ふ。は。委。し。か。ら。じ。下。小。引。る。今。集。解。す。七。奉。る。と。あ。る。は。大。御。葬。の。時。殞。宮。よ。て。も。の。ま。る。禮。儀。あ。れ。ど。猶。そ。れ。七。日。七。夜。ハ。だ。殊。小。齋。敬。し。む。俗。と。見。え。る。ゆ。天。若。日。子。饒。速。日。命。ハ。共。ニ。天。神。の。詔。

受給ヲは。すて。御使ヲ。天降シ。神等ヲ。あ。る。を。思。ふ。小。臣。の。列。小。坐。神。あ。る。事。著。々。と。ば。御。世。々。々。の。天皇命。ハ。大御喪ヲ。留。め。給。る。日。數。ヲ。合。せ。て。甚。く。短。ま。あ。ふ。と。ば。八。日。八。夜。形。ど。云。も。こ。ろ。臣。等。ハ。喪。を。留。め。給。る。事。志。あ。ふ。べ。し。さ。て。神。武。天。皇。ヲ。崩。坐。ま。と。ゆ。凡。十。九。月。に。し。て。御葬。ヲ。行。ひ。綏靖。天。皇。ヲ。十八。月。懿德。天。皇。ハ。十四。月。そ。の。甚。久。し。死。ハ。廿。月。天。顯宗。或。三。年。景行。安。康。武。天。皇。ヲ。あ。ど。小。至。ゆ。そ。の。短。き。も。れ。も。三。月。と。ゆ。少。き。と。あ。ら。ざ。り。た。か。き。ば。上。つ。代。に。も。た。の。き。み。し。の。



き其かどく小儀式の差別めありつらむと  
ハ云也。

今その詳サダりあは事ハ。いゝあは共トモ知チるルきキならぬ  
ど。おおろろここいいええど。天皇命の御儀ミギき。のけ巻ケマキも  
畏カシま御岩窟戸ミイハヤトの御祭ミマツリ比ヒ如コトく小コぞぞ何ナニにニむむかし。  
上ウよよ引ヒるル如コトく。喪スエに遊ユ也ヤとも。遊樂ユレクともあはは。  
何ナニの故ユぞと云イふ。まづ人の死シとる。彼カ天照大御  
神カミは天アメ岩屋小隱コモリマシ坐マて。世ヨに闇夜トコヤミよかれとに  
類タガある故ユ。其時の故事コトをまねびと歌樂ウタガキ多タ。其  
人ヒトを復タガ此世小還カハとある事コトと。招禱ヲキイる意イとめ起

きめ。さるルた万葉集小。日ヒ竝ナ知チ皇子ミコの崩給ツクシ事コト依  
事コトを。高照タカヒカる日ヒ之ノ皇子ミコハ。飛鳥アスカの淨宮キヨミヤ小コ神カミああぐ  
ら。太布フ坐マと。天皇スメミマは。敷坐シキマ圀クニと。天原石門アマノイハト乎ヲ開ヒキ神  
上アガリ々々座イ奴ヌ云々。ままと河内王カハチノミヤ。豊前圀トヨノヘノクニ小葬コムスヒる時  
の歌ウタ。豊圀トヨノクニ乃ノ鏡山カガミヤマ之ノ石戸イハト立タテ。隱コモリ尔ニ計ケ良思ラシ雖待マテ  
不來座キマサ。た石戸イハト破アレ手テカ毛モ欲得ガモ手弱タハヨワ寸女フツメシメ有者アリガ。  
爲ス便ベ乃ノ不知シラナ苦ク。ああどどと免マるルももて。古コ事コトとめ然シカ  
云イ。傳ツへし事コトをを知チるルし。ささききどどかかく遊ユびびせせ依ヨは  
依ヨるル。喪スエ小逢コトへる家人カネシメも。悲哀カネシメ比ヒ情コトああききののぶぶと  
思オモふふめめれれど。家人カネシメははのの形カタとむむと。其歌舞ウタマシははると

も。もととゆ異事あり。故から籍小。其死停喪十  
餘日。家人哭泣。不進酒食。而等類就歌舞爲樂。後漢  
書 喪主哭泣。他人就歌舞飲酒。三國志 親賓就屍歌  
舞。北史 とめ云。下さまぬあべとの風習を見聞  
て。唐人の云る。夫ら此の如し。況る大御葬の儀  
式。あどは。殊り儼重なりしなる。清し。  
さて素盞鳴尊。棺小作。冢るき木。殖生し給ひ。  
ると既くとゆ石棺。あどめ。何ゆ。あらむ。垂仁天  
皇の御世。たねどに。石作。云。姓。ま。定め給ひ。  
棺。たね。の雄。の。こ。あ。と。れ。御。揚。言。小。被。え。顯。見。

蒼生。た。奥津。棄。戸。小。將。臥。む。具。せ。よ。と。詔。る。ま。  
も。棺。此。時。と。ゆ。後。よ。作。る。も。た。あ。ら。む。と。  
思。え。る。小。是。と。ゆ。さ。き。伊。弉。冉。尊。の。御。葬。あ。り。  
し。小。依。ら。む。棺。あ。り。あ。る。こ。を。著。き。字。如。此。し。め。  
詔。る。の。蒼。生。の。棺。小。作。冢。る。ま。樹。字。此。時。殊。更。  
よ。定。め。給。ひ。し。も。た。あ。ら。む。と。又。石。棺。を。垂。仁。天。  
皇。の。御。世。と。ゆ。さ。た。小。あ。ら。む。と。云。る。と。れ。  
ど。崇。神。卷。よ。倭。迹。々。姫。命。を。葬。り。奉。る。時。の。事。也。  
故。時。人。號。其。墓。謂。著。墓。是。墓。者。日。也。人。作。夜。也。神。  
作。故。運。大。坂。山。石。而。造。也。あ。る。に。て。既。と。石。槨。あ。

世孫建眞利根命之後也。垂仁天皇御世奉爲皇  
 后日葉酢媛命作石棺獻之。仍賜姓石作大連公  
 也。とある也。此時不始め其官人多定免たる  
 に出そり。石槨字始め作さる由もあらば。  
 故古事記不。其大后比婆須比賣命之時。定石祝  
 作ツクリ祝蓋ツクリ也。記されし。昭るる。さて棺の制法也。  
 いるか。已巻む詳らねど。書紀不。奥津棄戸  
 將臥之具モチフサム。谷川士清シノガハ云く。是上古臥棺を用ひ  
 小多く石棺イシノカは。明證也。今古塚を發きたる。其屍を南と見  
 首よて手足を伸る。臥し。とる。か。已と云ゆ。と見

え。御陵記。山陵に發けて露きたる。石槨の長  
 記して。横三尺五寸。長九尺。仲哀天皇御陵長一丈五  
 尺。横四尺八寸。高五尺七寸。顯宗天皇御陵長四尺三寸。  
 横二尺四寸。高三尺九寸。崇峻天皇御陵長七尺八寸。齊  
天皇御陵。○原書は。長七尺。横二尺。元明天皇御陵。と  
 横一尺八寸。高一尺六寸。仁安元年九月廿二日  
公の棺は。事多。寸法長六尺。弘二尺。かどある。故  
 高一尺六寸とあり。か。何。ある。を。し。か。ど。ある。故  
 合せ考す。俗に稱ふ臥棺ネカ。か。已。し。事。字。め。思。決  
 むべき。形。ゆ。さて。孝德卷。小。夫王以上。云々。有。輜

車。上臣云々擔而行之。蓋此以肩擔と云。棺字裝束。車小載。引行く。上臣以下。神輿。かどの如く。昇行くものなり。小やあらむ。谷川士清の説。今京師又對馬より。武藏まよと我近き郷々小も其制なるが。いをゆる以肩擔輿といふ。亦ものあるを。埴輪も。此時小ぞ定め給ひきる。

埴輪も。埴土も。種々此器を作。其陵の廻りに輪の如く立る故。志の名けしも。此御世の二十年。倭彦命の御葬。小。近く仕奉。此者。陵域

小生。おのら埋めて。殉をしめ。泣吟音の加れ。或る爛鼻。た。肉。鳥。か。ど。れ。聚。り。噉。ふ。さ。る。を。いと哀。思。し。る。よ。り。作。ら。せ。給。ひ。こ。也。垂仁卷三十二年秋七月。皇后日葉酢媛命。薨。臨。葬。有。日。焉。天皇詔群卿曰。從死之道。前知不可。今此行之。葬。奈。之。爲。何。於。是。野。見。宿。禰。進。曰。夫。君。王。陵。墓。埋。立。生。人。是。不。良。也。豈。得。傳。後。葉。乎。願。今。將。議。便。事。而。奏。之。則。使。者。喚。上。出。雲。因。之。土。師。壹。百。人。自。領。土。部。等。取。埴。以。造。作。人。馬。及。種。々。物。形。獻。于。天。皇。曰。自。今。以。後。以。是。土。物。更。易。生。人。樹。

於陵墓爲後葉之法則。天皇於是大喜之。詔野見宿禰曰。汝之便議寔洽朕心。則其土物也。仍下令曰。自今以後。陵墓必樹是土物。無傷人焉。天皇賞野見宿禰之功。亦賜鍛師地。卽任土師職。因改本姓謂土師臣。是土師連等主天皇之喪葬之緣也。とある字始小て。新撰姓氏錄上毛野小。應神天皇は御陵は土馬あはし事見え。前王廟陵記は。神功皇后の山陵は半腹小。壺の如き物字車輪の如く敷竝るはとせといひ。古本今昔物語三十卷小。元明天皇按は元明ハの御陵は事云云。石

の鬼形共を地邊小廻らし。陵は墓様は立す。微妙く造まる石形也。外小を勝れはとこえ。今ハ大和添上郡大奈閉山と云は。狗頭の人形を穿はとる石あり。俗は。大奈閉は七匹狐と云物也。たるは。去あち桂林漫録は。欽明天皇の陵邊とて。奇古の石人四軀を堀出せいするも。世々の御葬小。土物は用ひし事知る者。天皇の御上あらため。階高は人高。猶垂仁天皇の御制はまゝに。埴物を樹し小もやあらむ。其を筑後国風土記は。上妻縣。々。南二里有筑紫君磐井之墓墳。云々。石人石盾各六十枚。交陳成行。

周匝四面當東北角有一別區號曰衙頭衙頭致政所也其中有一石人假容立地號曰解部前有一人髀形伏地曰偷人生爲偷猪仍擬決羅罪側有石猪四頭號賊物物賊物盜也彼處亦有石馬三足石殿三間石藏二間と見え武藏国栗橋を云所小く三軀は瓦偶人の頸手小玉を纏ひ紐小刀めきたるものを帶とる也堀出たる所のゆ桂林漫錄下野国那須郡侍冢の古墳とす高坏は状如る土器四花瓶の如きもれ一字堀出元祿五年紀事又常陸那珂郡平磯村の古冢は四面小陶器を埒址の如く廻らせ

と見え常陸国誌まと同村は海邊とゆ高二尺餘か依土偶人三軀を得事蹟雜纂同郡青山神社の側か依古冢とゆ瓦偶人の頭は堀出した也水戸領地理志○已上の圖ども下小舉とゆなぞ見え多依をも合せ考ふし類いと多の依を此かゝて棺擲小太刀鏡曲玉などをめ藏免て

かゝ依類の器を棺擲小藏めたると云正し死證をかけきと扶桑略記康平六年の條小五月十三日發遣山陵使是依去三月盗人發池後山陵掠奪寶物也とあ依山陵も成務天皇は御陵

にして。大和めぐりて此記此書を貝原篤信が元祿九年に加けるも此に。小。大和添下郡。神功皇后の陵。西小。大なる陵あ。正。按。神功皇后の陵。續日本後紀。承和九年十二月庚辰。條。北。則。神功皇后之陵。南。則。成務天皇之陵。とあれど。天皇の陵。ハ。神功皇后の陵。南。あるべき。陵。西。とある。誤。る。形。は。べ。石塚。といふ。里人。石を堀。取。とて。石棺。小。あ。とゆ。き。る。棺。は。開。ま。て。見。ま。さ。る。大。刀。短。刀。鏡。か。ど。あり。と。云。る。陵。め。即。此。天。皇。の。御。お。依。時。を。件。に。寶。物。と。も。此。の。大。刀。鏡。と。云。小。あ。た。り。て。聞。ゆ。古。今。著。聞。集。醍。醐。天。皇。の。御。葬。に。條。に。醍。醐。寺。北。山。陵。小。わ。た。し。奉。り。ま。る。に。御。硯。御。書。三。卷。黒。漆。管。

一合。琴。箏。和。琴。御。笛。か。ど。入。ら。れ。ま。り。と。こ。え。太。平。記。後。醍。醐。天。皇。崩。御。の。段。毛。利。家。天。正。本。に。御。遺。勅。小。任。せ。ま。御。形。改。め。ば。し。山。麴。色。の。御。衣。小。御。冠。を。召。せ。鳥。羽。院。に。御。傳。有。ま。る。三。掬。と。云。靈。劔。を。玉。體。に。添。奉。り。藏。王。堂。に。良。林。の。奥。小。葬。奉。る。と。云。依。小。に。此。御。世。の。不。ど。ハ。か。何。古。の。遺。風。あ。り。し。か。ら。む。と。思。え。る。小。附。て。も。古。人。を。殊。に。篤。く。も。の。に。る。き。理。あ。ら。ま。り。古。人。の。篤。く。葬。り。し。る。語。文。小。見。え。と。め。天。皇。命。に。大。御。身。小。添。給。ふ。か。ど。れ。御。裝。束。の。器。物。を。悉。く。に。造。り。備。へ。て。藏。

め奉<sub>レ</sub>けむ。故<sub>レ</sub>朝廷<sub>ヲ</sub>親しく仕奉る臣連伴造。  
又<sub>レ</sub>国々の国造縣主稻置<sub>カドモ</sub>。古風俗<sub>カド</sub>  
し<sub>レ</sub>るる<sub>レ</sub>。さ<sub>レ</sub>其器物<sub>カ</sub>。棺小入<sub>キ</sub>。石槨<sub>ニ</sub>納  
め。或ハ別小<sub>レ</sub>壺<sub>カ</sub>埋<sub>カ</sub>。其<sub>レ</sub>中<sub>ニ</sub>藏<sub>ル</sub>も  
あめ<sub>ト</sub>聞え<sub>ル</sub>。其<sub>レ</sub>諸<sub>ノ</sub>古墳<sub>ヲ</sub>を發<sub>キ</sub>て。曲  
玉<sub>カド</sub>得<sub>ル</sub>趣<sub>ヲ</sub>見聞<sub>ク</sub>考ふ<sub>ル</sub>。伊勢<sub>ノ</sub>国  
鈴鹿<sub>ノ</sub>郡長岡<sub>ノ</sub>冢<sub>カ</sub>。素燒<sub>カ</sub>器出<sub>タル</sub>中<sub>ニ</sub>曲  
玉<sub>カ</sub>一<sub>ノ</sub>顆<sub>アリ</sub>。神器<sub>集</sub>下野<sub>ノ</sub>国那須<sub>ノ</sub>郡の侍冢<sub>カ</sub>  
カ。高坏<sub>カ</sub>狀<sub>アル</sub>土器<sub>四</sub>。銅鏡<sub>一</sub>面。太刀<sub>カ</sub>鎧<sub>カ</sub>。折<sub>タル</sub>。ま<sub>カ</sub>銅<sub>小</sub>鏡<sub>一</sub>面。管玉<sub>二</sub>顆<sub>。鏃</sub>十八<sub>カ</sub>

堀出。<sub>元祿五年紀事</sub>長門<sub>ノ</sub>国阿武<sub>ノ</sub>郡東椿木<sub>ノ</sub>郷阿武井村  
の石槨<sub>カ</sub>。曲玉<sub>。管玉</sub>。金鑲<sub>。石劍</sub>。八稜<sub>カ</sub>鏡<sub>カ</sub>。得  
た<sub>レ</sub>。雪衣堂<sub>某</sub>常陸<sub>ノ</sub>国那珂<sub>ノ</sub>郡北酒出<sub>ノ</sub>村<sub>カ</sub>。壺十  
一<sub>アリ</sub>。中<sub>ニ</sub>曲玉<sub>數顆</sub>出<sub>ル</sub>。水戸<sub>領</sub>地理誌<sub>茨城</sub>  
郡吉田<sub>ノ</sub>村の古冢<sub>カ</sub>。曲玉<sub>。管玉</sub>。得<sub>ル</sub>。森戸<sub>ノ</sub>村の石  
槨<sub>カ</sub>。管玉<sub>。曲玉</sub>。銅鑲<sub>。劍</sub>。あ<sub>リ</sub>。已上<sub>並</sub>係<sub>信太</sub>郡安  
中<sub>ノ</sub>郷大塚<sub>ノ</sub>村<sub>カ</sub>。石棺<sub>カ</sub>。鍔<sub>。冑</sub>。鍔<sub>。鎧</sub>。太刀<sub>二</sub>銅鏡<sub>一</sub>  
。石鏡<sub>三</sub>。石劍<sub>及</sub>種々<sub>カ</sub>。陶器<sub>四</sub>十三<sub>種</sub>。得<sub>ル</sub>  
と<sub>イ</sub>ひ。墳墓<sub>考</sub>。又<sub>レ</sub>諸<sub>ノ</sub>古冢<sub>カ</sub>。穿<sub>チ</sub>。土器  
。得<sub>ル</sub>。小<sub>カ</sub>。巳<sub>午</sub>。方<sub>小</sub>在<sub>ル</sub>。其<sub>レ</sub>中<sub>ニ</sub>曲玉



多出る形也。佐藤成裕説 少いる家をもて。大抵其状  
を思ひ辨ふべきあり。曲玉鏡等の圖ハ下ニ載

る

殯宮アキミヤ故作り。白細布シロコ小装束ヨソヒカザ飾カザす。其処ココ小御棺コミツを

置き奉ツカサドす。その官人ツカサドも任ヨサして。種々クサダに禮儀レイギを行

ひ。

殯宮アキミヤも。万葉マンヤフ三小。左大臣長屋賜死之 大皇オホキミ之命ノミコト

恐カレシ大荒城オホアラキ乃時ノトキ尔波ニハ不有アラネ跡ド雲隱クモガク坐マスとある大荒

城キも。御喪ミツの時トキを云イハふ。同集ドウシツ中ナカに。某尊ナニサ殯宮アキミヤ之時トキ

とある小同コドウじけきキぞ。阿羅紀能美夜アラキノミヤを訓ツケ考カウし。

かくて荒城アラキと云イハふ意イも。鏝アキ璞ハクかどに阿羅アラ小同コドウじ

く。新アラタ小死コシる家イヘまゝにて。未イナ何ナニとも爲ニあへぬナ

ぞ。其意イふて。城シロも墓オモテの紀キ小同コドウじ。さきぞ新アラタ小死コシ

た家イヘまゝふて。未イナ葬ムスすあアるルほど。且ツ姑メく收ツク

置オク処トコロも。阿羅紀アラキと云イハふ。天皇テンノウかどのも。其宮ミヤも阿

羅紀能宮アラキノミヤと申イハせざる形カタ也。已上古事記傳卷三十

又マタその注ツケ文フミ云イハふ。今イマ伊勢イセの竹タケ或ナ郷サト松マツ坂サカに俗ソコに人ヒト

の三ミ尺シヤクばあアる家イヘも。細ホソ竹タケ或ナ郷サト松マツ坂サカに俗ソコに人ヒト

二ニ結ムスむ。著ツケて。二ニ日ヒあアる家イヘも。細ホソ竹タケ或ナ郷サト松マツ坂サカに俗ソコに人ヒト

標ヒシと。其ソノ名ナも。阿羅紀アラキ加カ紀キと云イハふ。門カド口クチ小コ植ウエ置エるル荒アラ城シロにニ此コノ

小コ無ム火ヒ殯アキ歛シム。此コノ云イハふ。衰オソ那ナ之ノ阿ア餓ガ利リとあり。仲ナカ哀アハ紀キ

さも阿羅紀と阿賀理とは言え  
 本と別あて但し阿羅紀とあるを  
 訓ても違えど然れど此ノ訓  
 もひごとく然れど此ノ訓  
 アラキノ三ヤと訓ぞ直りすと  
 殯ふと何ふ言の意をアガリ  
 賀理てふ言の意をアガリ  
 申は憚り多其底津根を以て  
 申は憚り多其底津根を以て  
 の事あゆ師の遠江人今上幸  
 京上事とて三日は志阿宜と  
 如し事とて三日は志阿宜と  
 上小稱又云所知形ど云幸  
 上小稱又云所知形ど云幸  
 な依を案た上下津黄泉固  
 な依を案た上下津黄泉固  
 扱みど天子上下坐と云  
 扱みど天子上下坐と云  
 避あゆ死  
 欽明天皇の皇居大和の磯城島金

刺宮あ依る書紀小殯于河内古市ま敏達天  
 皇と譯語田幸玉宮小坐初る起殯宮於廣瀨  
 天智天皇ハ近江大津宮小崩ましく殯于新宮  
 と見え推古孝徳天武ハ三御代也共殯宮を  
 其宮庭小起給牙ゆ加れバ宮中小め他処に  
 も其時ハ便宜子とゆゑ造らきとる也仲哀紀  
 小窃收天皇之屍云々而殯于豊浦宮爲无火殯  
 欽無火殯阿餓利謂とある小據らばあるての御  
 葬よ也加那らば殯宮ハ火燄儀式ハあて  
 し形るべき字此ハ御喪祓お死坐る時ハ事

ある故乎。无火殯歛也云。し形る。さして此  
火を燎モヤに事め。加比天石屋戸御祭の時小天鈿  
女命メノミコトの事云て。擧庭燎巧作俳優相與歌舞古語  
拾とる。故實に依る。殯宮小て歌舞する時小  
と。殊乎多く庭燎ニハをたぐ儀式にありし小もや  
あらむ。殯宮を装束奉じし事ハ。万葉集二廿五  
高市皇子尊城上殯宮之時。柿本朝臣人麻呂の  
歌小。吾大王皇子之御門乎。神宮尔装束奉而云  
云。又十三廿八。小大殿矣。振放見者。白細布飾奉  
而云々とある。小て明著也。かくてその宮を掌

とる官人。允恭卷。殯宮大夫玉田宿禰と云  
見え。孝徳卷。以小山上百舌鳥土師連主殯宮  
之事。ふどもあるは。御食坂奉り。誄詞を奏し。歌  
舞に承禮儀也。此宮小行を依る。故あり。大審令  
の下部。土部十人掌贊。相凶禮。義解。謂凶禮者  
送終之禮。即土師宿禰。年位高進者。爲大連。其次  
爲小連。竝紫衣刀劔。世執凶儀。是をも合せて。又  
古より土師氏の仕奉り。さる思ひや。依る。又  
臣列を正以下の人。も墓を作り。波夫理にるま  
て。屍を土中小埋あて。其処に喪屋と云ふ  
構へ。葬の禮を行ふ例あり。書紀に。是時天國  
玉聞其哭聲。則知夫天稚彥已死云々。便造喪屋

而殯之。まゝ一書。時天稚彥之妻子。從天降。來將柩上去。於天作喪屋。殯哭之。まゝ古事記。同。小於其処作喪屋。而河鴈爲岐佐理持鷺爲掃持翠鳥爲御食人。雀爲碓女。雉爲哭女。如此行定。而日八日夜八夜以遊也。とこえとるのみ。小て。它古書。小喪屋といふことは見あたらげされ。喪葬令集解。小釋云。輜車。輜喪車也。或云。輜謂葬屋也。按葬恐。車謂載之。率下云々。跡云。輜謂喪屋造載於車云々。又說云。輜謂喪屋云々。或云。輜俗云小屋形也。と云事ハあり。さてこの喪屋。神代

の喪屋と同じ名形。のら。此集解作る。かど。小ハ。既古。牙。此如。喪屋作る事ハ。絶たき。と。棺。字。裝束。て。車。小。載。る。く。物。せ。る。を。然。云。系。よ。く。神。代。姑。稱。の。遺。ま。る。れ。ゆ。又。其。字。小。屋。形。を。し。め。云。る。を。棺。制。の。屋。形。ハ。似。多。ゆ。故。小。て。め。有。る。し。さて。殯。せ。し。事。を。靈。異。記。小。他。田。舎。人。蝦。夷。者。信。農。因。小。縣。郡。跡。目。里。人。也。云。々。寶。龜。四。年。癸。丑。夏。四。月。下。旬。蝦。夷。忽。卒。而。死。妻。子。云。々。點。地。作。塚。殯。以。置。之。る。と。大。伴。連。忍。勝。者。云。々。寶。龜。五。年。甲。寅。春。三。月。倏。被。人。讒。堂。檀。越。所。打。損。而。死。略。眷。屬。云。々。點。

地作家殯收而置死云々。死ハ屍のと見えとき誤あらむ。  
孝徳天皇の御世小凡王以下及至庶人不得營殯と制給ひしかど。猶後までもありし事著く。又此制小依り。上代小凡人のも。喪屋を作し。若然らば。至庶人云々といふ。考支由あきか思ふる。見今も伊豆の下田北南ある新島小て。喪ある時小。喪屋又門屋と字造ゆ。其処に居て喪を終り。三宅島小ても云。父母に喪五十日の間を。喪屋小忌籠ゆ。其飲食ハ家より持送る例也とぞ。南方海島志又蕃國

と仕奉る琉球國ハ風俗平岡あぢのやうあ依所。死人安置く所多つとて。其字もやと云と云ゆ。琉球使者記 小島即皇國小ハ絶るは古風也。却て島國と蕃國小存じしもの形なげし。七日七夜ハ御酒御食故。平生の如く備り奉り。又その時々小御飯を進め。

七日七夜ハ既云る如く。甚々嚴重齋るひ敬しむ俗ある故。誠を致し心を盡して。御酒御食をそあへ。又其をゆく平生小異ある小也。御膳ものを進じしとめあり。と聞えと

已。其也喪葬令比遊部とある所の集解子。釋云。  
中略遊部隔幽顯境鎮凶癘魂之氏也。終身勿事。故  
云遊部。古記云。遊部者在大倭國高市郡。生日。天  
皇之苗裔也。所以負遊部者。生日。天皇之孽圓目  
王娶伊賀比自支和氣之女爲妻也。凡天皇崩時  
者比自支和氣等到殯所而供奉其事。仍取其氏  
二人。名稱禰義余此也。禰義者負刀竝持戈。余此  
者持酒食竝佩刀竝入內供奉也。唯禰義等申辭  
者。輒不使知人也。後及於長谷天皇崩時。依廢比  
自支和氣。七日七夜。不奉御氣。依之阿良備多麻

比岐爾時諸國求其氏人。或人曰。圓目王娶比自  
岐和氣女爲妻。是王可問云。仍召問答曰。然也。召  
其妻問答云。我氏死絕。妾一人在耳。即差負其事。  
女申云。女者不便負兵供奉。仍以其事移其夫圓  
目王。即其夫代其妻而供奉其事。依此和平給也。  
爾時詔自今日以後。手足毛成。八束毛遊詔也。故  
名遊部君是也。但此條遊部謂野中古市人歌垣  
之類是也。下略。○佩廢女の三字。とこえたる。此  
文の大意也。御世々々の天皇崩坐る時。伊賀國  
比自支和氣氏比人二人字取ゆ。其字禰義余此

と名けり。七日七夜の御酒御食。殯所小備奉  
る。就て稱辭をも申に例ありし。小景行天皇  
崩坐し時。其氏絶り。其儀ありし。故以て。天皇  
の神靈甚く荒び給ひしに仍て。其氏を求め志  
免給る。小垂仁天皇は庶孽小坐に。圓目王の妻。  
即其氏人。賜る字以り。其職を差負せ給ふ時。  
女を刀戈字持り仕奉る。小便宜らびと申せり。  
故圓目王。其妻を代り仕奉る。御魂は和平奉り  
し。ゆ。遊部君と云姓を賜ひま。其遊部は唯酒  
食を備ふ。其のこは職小あらで。幽を顯とせ

境小隔て。死者の魂は癘暴ふる。和平め鎮む  
。其方故知する。氏の人形とせ由也。已上信友  
大要を。加くて書紀天武卷。天武天皇崩る。せ  
取きり。當時の事。朱鳥元年九月甲子。云々。是日肇進  
奠。殯宮小移し奉りて。り。ま。と持統卷。小。同。度  
を。元年正月丙寅朔。云々。於是奉膳紀。朝臣眞人  
等奉奠。八月丙申。嘗于殯宮。此日御青飯。二年八  
月丙申。嘗于殯宮。冬十一月戊午。於是奉奠。かど  
ある。合せ考ふるに。其を。小。御飯を捧  
け奉りし。も。此。ある。事。明ら。小。知られる。ゆ。此。嘗

字を新嘗相嘗かどの嘗と云義みて。天皇の御  
手招くら大行天皇の神靈を御食奉る事の天  
下諸神を祭らせ給ふ儀小同じきを以て用ひ  
たる文字なるを遷し奠と嘗と文字異よせるめ  
故ありさて凡人をいへどめ人れ死す身を離  
遊る魂即神小て其運用の異と奇しき今  
の現小見え聞えて或も病とる人よ託く種々  
れ教ふ所と或も其魂の瘡氣小て愛しと思ふ  
子孫の絶失る事如どあ依字思ふよ荒人神と  
大坐るに。天皇の御魂は御怒り小き殊り甚じ  
き禍災も起るる理かまど。其を和平鎮むる  
職をめ任し置給ひしものなるるに。かゝれば

誰この人も死人故疎にして。魂は瘡氣あらじ  
むまじた事小こそあふるをれ。又書紀に青  
飯字ヒシキオホノと訓さしあるは。上件小云  
依。比自岐和氣氏は。御膳たてゑある故事小仍  
ては。訓義ある事を知らるるに。

諸皇子等及大臣大連とゆ已下。其次第を以て誄  
詞を奏し。種々の物を備へ奉りて其誄詞を  
奏し小も。又くさくは。禮儀ぞあはせ依。

誄詞を。書紀に誄字をシヌビコト。又シノビコ  
トとも訓て。人の身あるか正た依時。其人を慕び



て。その靈レイ小告コカクふ詞コトあり。誄シるをせ。依ヨ時トキのこと  
多オホク。能ヨクよクせズとある。故ユヘ思フへバ。其コト詞ハを作スるも  
讀ヨムも。たヤにカらざりし不ト志スられて。いのに  
めでとく何カをれかりけむ。其コト詞ハも儀式モ絶ズ  
世ニ傳ハえらびいとくあらしき事也。まと  
上ノ古ト中ノ古ト也。其儀式も亦よれく異れゆと  
こを聞えとき。さて敏達卷み。馬子宿禰大臣佩  
刀ヲ而誄物部弓削守屋大連听然而咲曰。如中獵  
箭之雀鳥焉。次弓削守屋大連手足搖震而誄焉。馬  
馬子宿禰大臣咲曰。可懸鈴矣。古へハ專武まを  
尚びしりバ。後世を

のおと刀を擬置く事あどいなく。天皇の大前に  
云る遊部士師連。此あらる大臣は。かゝる用明卷  
大禮も佩刀を仕奉りしあらる也。三輪君逆の事字於殯庭誄奉曰。不荒朝廷淨如シ  
鏡面臣治平奉仕。漢文ハあらるさまとれど。推  
古卷小。二十年二月庚午。改葬皇大夫人堅塩媛於檜隈大陵。是日誄奉於輕街第一阿倍内臣鳥。誄  
誄天皇之命。則奠靈明器明衣之類。万五千種也。第二諸皇子等。以次第各誄之。第三中臣宮地連。鳥  
鳥摩侶。誄大臣之辭。第四大臣引率八腹臣等。便  
以境部臣摩理勢。令誄氏姓之本矣。時人云。摩理。

勢鳥摩侶二人能誅唯鳥臣不能誅。堅塩媛の皇  
妃諸皇子ハ其御腹子坐有皇子等。明皇の皇  
ハ種々の物字備有奉已種とあるは皇子等  
明衣明器之類万五千種とあるは皇子等  
詞ハ中々物字備有奉已種とあるは皇子等  
物者甘菜辛菜祝詞の奉已種とあるは皇子等  
物者甘菜辛菜祝詞の奉已種とあるは皇子等  
妙和妙荒妙爾稱藻原任者能廣物野源其  
もあはしねるる第一第二とあるは皇子等  
次第ありし事あるべし。大臣引率ハ腹臣等  
云々とあるを思ふ。由縁の本宗と引率ハ腹臣等  
類字とあるを思ふ。由縁の本宗と引率ハ腹臣等  
稱て古へよゆかしく聞えとや奉已武卷小舉已先  
祖等所仕状進誅焉とあるは皇子等  
舒明卷小。是時東宮開別皇子。年十六而誅之。  
皇極卷小。元年十二月甲午。初發息長足日廣額。

天皇喪。是日巨勢臣德太代大派皇子而誅次小  
德粟田臣細目代輕皇子而誅次小德大伴連馬  
飼代大臣而誅乙未。息長山田公奉誅日嗣。代大  
子云々とあむむ自らも誅白し。まよ或人字  
して奏さしむる事もある。息長山田公  
舒明天皇の由縁。祖母廣姫皇后的御父息長  
真手王の由縁。日嗣を誅白せる也。天武  
卷小。朱鳥元年九月丙午。九日。天皇病遂不差崩  
于正宮。甲子日。云々。是日肇進奠即誅之。第一  
大海宿禰菟蒲誅壬生事次伊勢王誅諸王事。大  
宿禰ハこの天皇の御乳母の氏族小大御名  
をも大海皇子と稱し奉る。かどれ事ハ皇の故  
第一小壬生の事字誅せる也。上の誅天皇之命  
とある同趣ときこゆ。次は諸王事。天皇之命

○葬禮私考

○二十四

群官の誅此事を云る。あはれ卷第二諸皇子。第三誅大臣之辭。皇極卷。代皇子云々とある。次小代大臣而誅と云る。次第のうち合て聞ゆ。皇子思ふ。第一小天皇の大命を誅し。第二諸皇子。第三大臣よゆ。下諸群官と。次直大參。犬定る。きる。例あはれ。し。こととある。し。次直大參。縣犬。養宿禰。大伴總誅。宮内事。次。淨廣肆河内王。誅。左。右大舍人。事。次。直大參。當麻真人。因見。誅。左右兵衛。事。次。直大肆。采女朝臣。筑羅。誅。内命婦。事。次。直廣肆。紀朝臣。真人。誅。膳朝臣。事。乙丑。云々。是日。直大參。布勢朝臣。御主人。誅。太政官。事。次。直廣參。石上朝臣。麻呂。誅。法官。事。次。直大肆。大三輪朝臣。高市麻呂。誅。理官。事。次。直廣參。大伴宿禰。安麻呂。誅。

大藏事。次。直大肆。藤原朝臣。大島。誅。兵政官。事。丙寅。云々。是日。直廣肆。阿倍久努朝臣。麻呂。誅。刑官。事。次。直廣肆。紀朝臣。弓張。誅。民官。事。次。直廣肆。穗積朝臣。虫麻呂。誅。諸司。事。次。大隅阿多隼人。及倭河内馬飼部。造。各誅之。丁卯。云々。是日。百濟王。良虞。代。百濟王。善光。而誅之。次。因々。造等。隨參。赴。各誅之。持統卷。よ。同時の。元年春正月丙寅朔。皇太子率。公卿百寮人等。適。殯宮。而慟哭焉。納言。布勢朝臣。御主人。誅之。禮也。誅畢。衆庶發哀。云々。甲申。使直廣肆。田中朝臣。法麻呂。與。追大貳守君。効。



あきまを試み遠く祖の神代よ天は神は詔を承  
給えりて我の祖の地奉記は神は詔を承  
汚奉むと思へるに厭ひ臣等願ふ事あり  
今奉む此世をばらむと甚く惜しむ奉る趣を奏し  
く棄さ給ふらむ今葬所極幸行さむと趣を奏し  
臨みる奉詔皇祖等之騰極次第とある小皇極  
紀深ま故あ終らむと奉詔日嗣とある小皇極  
て深ま故あ終らむと奉詔日嗣とある小皇極  
大御業を嗣の御位大看任し皇を奉坐し御  
に坐し御子と申す例は給ふ事あり皇御子  
日嗣御子と申す例は給ふ事あり皇御子  
天地御子と申す例は給ふ事あり皇御子  
小葬の御子と申す例は給ふ事あり皇御子  
見奉給ふ事あり皇御子  
深ま故あ終らむと奉詔日嗣とある小皇極  
万世の御子と申す例は給ふ事あり皇御子

との意にて誅詞の禮にいたし終り此事如く  
かちの御定め後葬禮を再興給ふ時小諸臣  
以下詔詞ハ後葬禮を再興給ふ時小諸臣  
以行ふ詔詞ハ後葬禮を再興給ふ時小諸臣  
小行ふ詔詞ハ後葬禮を再興給ふ時小諸臣  
事行ふ詔詞ハ後葬禮を再興給ふ時小諸臣  
奉さるさる大抵推考はちて持統天皇と正  
後の志はびおと云々上件小云る趣中甚  
く異小して全く御謚を上げるた免の事聞え  
るゆ其え續紀子大寶三年十二月癸酉持統天  
の事從四位當麻真人智德率諸王諸臣奉誅  
太上天皇謚曰大倭根子天廣野日女尊又慶雲  
四年文武天皇十一月丙午從四位上當麻真人

○葬禮私考

〇二七

智德率誅人奉誅諡曰倭根子豐祖父天皇ま  
天平勝寶六年太皇太后藤原宮子崩條八月丁卯正四位下  
安宿王率誅人奉誅諡曰千尋葛藤高知天宮姬  
之尊光仁天皇崩の條事正三位藤原  
朝臣小黑麻呂率誅人奉誅上尊諡曰天宗高紹  
天皇桓武天皇の大御母高野新の事子延曆九  
年正月辛亥中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂  
率誅人奉誅上諡曰天高知日子之子姫尊と  
同天皇の皇后崩條小閏三月甲午參議左大  
辨正四位上紀朝臣古佐美率誅人奉誅諡曰天

之高藤廣宗照姫之尊日本後紀桓武天皇崩の  
條延曆二十五年四月甲午朔中納言正三位  
藤原朝臣雄友率後誅人左方中納言從三位藤  
原朝臣内麻呂參議從三位坂上宿禰田村麻呂  
侍從從四位下中臣王侍從從四位下大庭王參  
議從四位下藤原朝臣緒嗣右方權中納言從三  
位藤原朝臣乙叡參議從三位紀朝臣勝長散位  
從四位上五百枝王參議正四位下藤原朝臣繩  
主從四位下秋篠朝臣安人等奉誅曰畏哉平安  
宮御座志天皇乃天都日嗣乃御名事遠恐牟

恐母 誅白臣末畏哉日本根子天皇乃天地乃共  
長久日月乃共遠久所白將去御謚止稱白久日  
本根子彌照尊止稱白止恐牟恐母誅白臣末と  
こえて平城天皇淳和天皇の誅も之小同じ。但  
和天皇のハ始めは畏哉讓國而御其御謚ハ類  
座天皇とあるがことお家のこと  
聚圀史天長元年七月丙辰比條小平城の御謚日本  
根子天推圀高彦尊まと續後紀承和七年五月  
甲申比條小淳和の御謚日本根子天高讓彌遠尊と  
あるが如しさて上件は舉た象如く文武の御  
世とて誅白して御謚奉るふといハ正史小見え

そめおきど神功皇后オキナガ息長足姫尊を稱し安  
閑天皇を廣圀排武金日尊オホニオホニまと宣化天皇を武  
小廣圀押盾尊を稱せ象形どめ稱號と聞ゆれ  
也延喜式神名帳子尾張國愛智郡日割御子神  
紀社孫若御子神熱田大神の御子神とあるは  
御名日本武尊の御子たちある事著けまどは  
て神名と御史小見えざるハ是も別は稱號も  
後の御謚と奉れる故れるをさして此神名即  
趣の御謚とてこの御謚たてまつる事也甚  
上代とては禮儀あゆけむ事正史小ハ記され  
ざと知るよきも在るべき也此後大御葬の儀  
故再興し給えむ時小也加昭らば古牙の例は

まゝに稱名を奉じて。天地日月の共彌遠長久  
たゝ奉る傍支事昭るるに。かくて仁明天皇  
は御世。嵯峨天皇崩の御時とて。誄諡は事の史  
小見えざるは。廢とるへる故もこそ有ら  
免。さて臣とち誄を賜へることも。續紀よ  
時よ。宣ふとめ給ふる大命は。如くなりしか  
よ。その詞どもも。共平波夫理和謝考小いへ  
志のして皇太子を。公卿百寮を率ゑ。神靈を拜み  
給ひ。官人をして。大御葬の歌をうたえしめ。又  
國は造等ハ。參赴るは。小く。歌舞する儀式もあ  
り。

日嗣の皇子は殯宮小もれし給ふことと。持統  
卷よ。元年春正月丙寅朔。皇太子率公卿百寮人  
等。適殯宮。而慟哭焉。五月乙酉。皇太子率公卿百  
寮人等。適殯宮。而慟哭焉。二年正月庚申朔。ま  
十一月戊午の條小も。同じさるる記されしゆ。  
さてこの慟哭と云ハ。から國は禮小亦そあま。  
皇國の儀式小ハ。かきこと昭るる。いぬく哀  
給ふは。趣を示さむとて。かくは書れ給るる  
る。されど百官を率まして。御靈を拜るせ給  
ふことと。實小古へとて。の禮儀と聞えとて。喪



小歌舞まゐる事ハ。上にも云依如く。神代とゆは  
御儀ミツリ昭る故ユ。允恭ミコト卷小。新羅王聞ミ。天皇既崩驚ミ  
愁ウレヒ之貢上調船八十艘。及種々、樂人八十。云々。泊  
于難波津。則皆素服之。悉捧御調ミツケ。且張種々、樂器、  
自難波至于京。或哀泣。或歌舞。遂參會於殯宮。也  
あるが如く。蕃國ミヤコまでめ。皇國の制小仍と仕奉  
了マた。又天武卷小。因々、造等隨參赴云々。仍奏種  
種、歌舞。持統卷小。元年春正月丙寅朔。樂官奏樂。  
まゝ二年冬十一月戊午。云々奏楯節舞タテマツ。この舞  
祭の時マツルは。安倍氏アノベノミの舞ふ。吉志舞也。楯節タテマツと云由  
た。日本紀私記シキ手テ以楯タテ爲節度マツル。故名ナとあるが

如ニ。也見え。又天皇の大御葬ミコトノミタマシは。歌ふ歌ハ。倭建命  
の神魂ミタマハ。尋白智鳥シロチトリ小化チカて。御陵ミコトノミササとゆ飛行トビ以時  
は。事コト古事記コトニ。爾其コトニ后キサキ及御子ミコ等於コトニ其小竹コトノタケ之  
苕カサ杙キ雖足ミタマ踏破キリ。忘其痛哭ウレヒ。追此時ミタマ歌曰。阿佐アサ士怒シ  
波良ハラ許斯コト那豆ナヅム牟ム蘇良波スラハ由賀ユカ受阿ア斯用シヨ由久ユク那ナ。  
又入其海鹽ウレヒ而ナ那豆ナヅム美行ミヤウキ時歌曰。宇美賀ウミガ由氣婆ユケバ。  
許斯コト那豆ナヅム牟ム意富迦イホカ波良ハラ能ノ。宇惠具ウヱグ佐サ宇美賀ウミガ波ハ。  
伊佐用布イサヨフ又飛居トビ其磯イソ之時トキ歌曰。波麻都ハマツ知登理チドリ。  
波麻用波ハマヨフ由迦受ユカウ伊蘇豆イソヅム多布タフ。是四歌者シタカ皆歌其ミタマ。  
御葬也。故至今其歌者ミタマシ。歌天皇之大御葬也。とあ

るが如し。

次小人民どもも役て。山陵を構牙。即御棺發送  
已奉は。

山陵を造る小。多く人民も役たる事は。皇極卷  
小。二年九月丙午。罷造皇祖母命墓役。仍賜臣連  
伴造布帛。各有差。こハ其墓の事小。勞けるを。勞  
ひ給へる也。持統卷。元年冬十月壬子。皇太子  
率公卿百寮人等。并諸国司。国造。及百姓男女。始  
築大内陵。とあるは。皇太子草壁皇の御身づゐ  
ら統掌已給ひし也。稱徳天皇は御世小ハ。殊

佛子の尊ひ坐と。御葬は儀式も薄支。善事  
も爲とあるへる形勢ありし。と。續紀寶龜八年

八月。

稱徳天皇崩の條下。

興左右京四畿内伊賀近江丹波

播磨紀伊国役夫六千三百人。以供山陵。又後紀

大同元年三月。

桓武天皇崩の條下。

發左右京五畿内近江

丹波等国夫五千人。おどとえて。多くの民も役

たるの如きと。古のより較て。よよあく減

省し。かめき。上古山陵の制作は。大きありし

事。察ひやる。さして神代の三山陵ハ。山上の

高敞ある地をえらび。造りしものと聞えと

也。神武とゆ。孝元天皇までのハ。丘隴ツキ小就て墳  
を起し。開化天皇とゆ。以後。やゝ制ありて。垂仁  
の御世。備也。敏達は御世まで也。大抵同じ制  
あり。凡大小高卑。あると長短の定めあり。向方ムキサマも  
各異也。たきど。山は因多車。比如く造れ也。故前  
左方ヒダリにしろ。後を圓く。土成ツキは築成とある項也。  
御棺ミツツを藏奉ゆ。北域ミナカトコロ小溝を掘也。環らしとゆ。用  
明天皇と也。文武天皇までのハ。其狀圓マダラらあり。依  
内小。玄室ソノは構也。聖ミコトもて之を築き。大石を覆オホす  
るの中。石棺を南面にし。石を疊タガと多。羨道ミナチを

せるももて。其制嚴密あり。故に溝を環らしに  
事あり也。奈良の御世。小至て也。南向を用  
ひらき。この小。餘をみれ。舊モトは復されし也  
と云也。已上。山陵の制。は。蒲生秀實ヨシノが山陵志に  
る。其制を詳し。いさ。山陵を親ミと。拜イハし。事もある  
は。て。其。北域。諸陵式を考ふ。依小。東西南北各  
二町。安寧。崇神。垂仁。景行。仲哀。神功。應神。清寧。仁  
春日。山田。手白。香皇。女の。か。る。の。な。る。て。は。制。あ  
御墓も。此制なり。か。る。の。な。る。て。は。制。あ  
也。思。え。る。れ。ど。五。町。應。神。皇。極。八。九。町。仁。德。桓  
又。十。四。五。町。天。智。の。陵。押。坂。彦。あ。る。も。阿。ゆ。を。れ

尤土師石作比手工小課せ多。種々の器字作ら  
志め。天下の民字役多。山作比小財貨を費し給  
ふ事も多加比けむ。故孝徳天皇と。その尊卑の  
制限比定め給ひ。天智天皇ハ。石擲の役多やめ  
給えむとせられし。昭る。考徳卷下。大  
化二年詔曰。葬者藏也。欲人之不得見也。廼者我  
民貧絶專由營墓爰陳其制尊卑使別。夫王以上  
之墓者。其内長九尺濶五尺。其外域方九尋高五  
尋。役一千人。七日使訖。略中上臣之墓者。其内長濶  
及高皆准於上。其外域方七尋高。三尋。役五百人。

五日使訖。略中下臣之墓者。其内長濶及高皆准於  
上。其外域者方五尋高。二尋半。役二百五十人。三  
日使訖。略中大仁小仁之墓者。其外一本小内長九  
尺。高濶各四尺。不封使平。役一百人。一日使訖。大  
禮以下。小智以上之墓者。皆准大仁。役五十人。一  
日使訖。凡王以下。小智以上之墓者。宜用小石。略中  
凡王以下及至庶民。不得營殯。凡自畿内及諸国  
等宜定一所而使收埋。不得汚穢散埋處々。大仁  
大禮。小智。推古天皇十年十二月小定め給。仁  
冠位を云ゆ。さて石原正明が説。此位階ハ今  
制と異なる故。あつべきやう。形々れど。大加と

徳ハ一位仁ハ二位禮ハ三位信ハ四位義智  
ハ六位臣七位八位谷川士清考小下文仁小仁と  
云々對きて思ふ小大徳小徳云云仁小仁と  
云と制給ひ喪葬令ふ凡三位以上及別祖氏宗  
竝得營墓以外不合この義解ず別祖者別族之  
始祖也氏宗者氏中之宗長也とありかれば  
別は氏を賜ふ人まゝその氏々は長を墓を  
營す其同族を其墓所小葬す庶民を預め土地  
を定め置き葬らしめ給る也かくて罔々小あ  
ゆる塚上は美し石を敷きさて其石構の戸

をぎ南小向て高さ七尺まゝ九尺ばかりある  
石を疊み平地小をえ其際會は埴土を塗り底  
に平か石敷敷並べ大石を蓋せし  
其の上小冢を築上しものあり已上墓制ハ播磨風土記河内  
安宿郡松岳古墳圖下野那須郡湯津上村侍塚  
圖筑前續風土記已紀行山吹日記山陵志の  
説まると余が近き郷里にあること知ら小て古へ  
墓制を見てかく考たるなり陵墓の制ハ猶下  
合せ考ふ合せ考ふ  
其鹵簿ハ岐佐理持まゝ掃持まゝ御食人哭女か  
どあり玉笥は飯盛玉椀は水をも青旗

赤旗アカハタをさしたて。楯タテ又帷帳帷帳を招ヒキら糸イト笛フエ大角オホツノ小角コツノを吹フクき。金鉦カネシ鏡鼓キョウコをうち鳴ナゲし。秉炬ヒキを燎ヒキして仕奉シキることは尋常ヨソツネから糸イトと。其它ソノカも大加オホカと行幸ヨクキの儀ケ式ガキの如カくかカにカるカし。

えふに儀の史シに見えと依ヨる。天若アマノワカ日子ヒコが死シし條ジョウの古事記コトシヅメ小岐佐理持コノササキ傾頭カササキ者ノ持テ掃持ハキテ御食ミケ人ヒト尸書シ紀キよ碓女ウサメ春女ハルメ紀キよ哭女ナキメと云官人ツクシを任ヨサし招ヒキる事コトぞ始ハジまハあアにニるル。岐佐理持ノササキハ詳サからぬど。弘仁私記コノシヅメ小死コノシ人ヒト之食ノケ持テるルと釋紀シヅメ小引コノヒキる私記シヅメ小葬送コノマタ之時トキ戴テ死者シノヒ食片ケカ行ユク之人ノヒト也ナリ。とトるル。

如カく。御食ミケ持テ行ユク人ノヒト招ヒキるル。御食人ミケノヒトも其御食ミケノヒトの事コトを掌テ依ヨ人ノヒト。まマと哭女ナキメ也ナリ。今イマめ紀伊キイに熊野クマノまマえ。老婆オハナを備ヒふ。死シるル由ユを郷黨サトに告ツぐるルのノあり。上總ウヅマツに富津ツツと云イわハとトにニるル。女メの死シるル時トキ。哭女ナキメとて白被シラカを著キるル。棺コファンの前マエ小哭泣オホラ招ヒキるル行ユクのノあり。まマと今常陸イマツチの筑波ツクハに郷サトにニるル。風俗フウゾク小コて其夫ウツの死シたル時トキハ妻メあるル者モノを哭女ナキメが背セ負オて哭ナク招ヒキるル。例レイ云イふ。掃持ハキテハ。台記ダイキ久壽クシュ二年ニニ十月ジュウ七日ニチ。高陽院コウヤウイン葬マタの條ジョウ。小出コノデ御ミ之後ノチ。民部大夫タテマツ重成シゲナリ。以ヨリ竹タケ帚ハシ御所ミヤノまマと神代カムヤマト卷口マクシ訣ケツ。今イマ北陸キツシク民俗ミンゾク送葬ソウザウ以ヨリ帚ハシ掃ハキ死シ人ノヒト之跡ノアト。以ヨリ帚ハシ葬マタ墓地マタ。阿波アハ因イ人ノヒト小杉コノサキ眞瓶マコト云イ。我ワ因イるル。

○葬禮私考

○三六

事あはと云ゆ。又我郷俗は。棺とる。即古風  
 の出し跡を。帚もて掃ふ事あり。棺とる。即古風  
 あり。まゝと書紀一書に。造綿者。穴人者。あど云官  
 人もあり。造綿者ハ。屍のちる。がざらむ。糲は。棺  
 其綿を多く。内空処。綿して。ぞ。填め。と。め。け。む。  
 人。を。死。人。小。供。る。獸。肉。を。料。理。行。ふ。人。あ。る。る。し。  
 武烈卷小。鮪臣の戮されし時。其妻影媛が悲め  
 る。狀。を。賦。歌。す。拖。摩。該。備。播。伊。比。佐。倍。母。理。拖。摩  
 暮比爾。瀾。逗。佐。倍。母。理。釋。紀。に。言。人。死。之。後。備。飯  
 田。久。老。云。今。め。吾。郷。の。葬。儀。小。極。の。先。は。水。持。と  
 て。土。盃。に。水。を。盛。り。持。つ。子。の。役。と。せ。む。と。い  
 る。器。小。飯。を。入。る。も。と。正。皆。女。の。役。と。せ。む。と。い  
 ひ。契。沖。が。説。は。死。者。小。飯。水。子。の。役。と。せ。む。と。い  
 云。か。今。我。郷。の。俗。に。も。死。人。の。親。し。き。者。は。役  
 又。葬。の。時。は。膳。持。と。て。死。人。の。親。し。き。者。は。役

古風なり。是と。何る。飯。ま。と。水。を。持。る。か。と。は。  
 大御葬にも。加。形。ら。げ。如。此。在。し。あ。る。傍。し。其。若  
 日子の葬。は。岐。佐。理。持。御。食。人。あ。り。と。い。ふ。旗。を。立  
 ても。上。つ。代。の。あ。べ。て。れ。風。推。測。る。る。と。い。ふ。旗。を。立  
 る。事。も。万。葉。集。鈔。小。常。陸。風。土。記。を。引。き。黒。坂。命  
 の。黒。坂。命。之。輸。輜。車。發。自。黒。前。山。到。日。高。見。之。國。  
 葬。具。儀。赤。幡。青。幡。交。雜。飄。蕩。雲。飛。虹。張。炎。野。耀。路。  
 時。人。謂。之。幡。垂。罔。後。世。言。便。稱。信。太。罔。と。い。え。万  
 葉。二。天。皇。崩。御。之。時。倭。太。后。御。作。歌。は。青。旗。乃。木  
 旗。能。上。乎。賀。欲。布。跡。羽。目。爾。者。雖。見。直。爾。不。相。香  
 裳。の。こ。の。御。歌。は。意。を。御。葬。は。立。た。る。青。旗。乃。木。幡  
 の。邊。を。今。過。させ。給。ふ。は。依。る。大。御。魂。た。か。し

○葬禮私考

○三七

面影こ加よひ給ふとは目小ハみゆきど御喪葬  
 令小凡親王一品幡四百竿二品幡三百五十竿  
 三品四品幡三百竿諸臣一位及左右大臣皆准  
 二品二位及大納言准三品三位幡二百竿太政  
 大臣幡五百竿せとえと倭小く大御葬小ハ殊  
 更種々此幡多加ゆむ事知るべし庶人の上  
 習ひ多上代小奢幡た給る事もあるせし件の禮子  
 の徒ハや子奢せ數十竿を設くは不ど富豪  
 かは三代格延曆十一年七月廿七日の官符小應  
 えは三代格延曆十一年七月廿七日の官符小應  
 禁斷兩京僭奢喪儀事右被右大臣宣僞奉勅送  
 終之禮必從省要如聞豪富之室市廓調之勅送  
 猶競奢靡不導要如聞豪富之室市廓調之勅送  
 設幡鐘訛缺諸如此類不可勝言貴賤既無等差

資財空為損耗云々自今以後勿使更然とこえ  
 たき云る條小黃幡記六條攝政基實公葬具の  
 輔仁薨とある條小黃幡記六條攝政基實公葬具の  
 幡まと中右記白河天皇崩の條子無前火并持  
 條左衛門尉右衛門大夫其葬の事を幡左四  
 黄幡とある用ふる古牙遺風と聞えとは但し  
 式如かはと用ふる事をるべし帷帳を孝德卷  
 大化二年三月甲申の詔夫王以上云々其葬  
 時帷帳等用白布上臣云々其葬時帷帳等用白  
 布下臣云々其葬時帷帳等用白布大仁小仁大  
 禮小智云々其帷帳等宜用白布庶人亡時收埋  
 於地其帷帳等可用麁布一日莫停採とある帷



帳倭名鈔屏障具也。帷釋名云帷和名加圍也。以自障圍也。帳釋名云帳張也。施張於床上也。とあるもの小て。喪家小留置く時。用ふるもの形らむと思たるれど。あゝ若。喪を留むる時の事あらば。葬時云々と云る由れ。又一日も喪を留めざれば庶人れ。帷帳を用ふる由なきれば也。さらば此帷帳をいなるもれと思ふ。葬を送る時。棺おど障へ蔽ふ幕の如くもれ小。倭名鈔葬送具よめ。歩障喪禮圖云。白布帷以障婦人。この障婦人と云え。西土の制も

て。皇國のたた。棺を蔽ふため小。用ひつる形。其状を衣垣キヌガキの如く小ぞ。何にけむかし。衣垣とい。絹よるま布よるま。引延く物を隔つ。皇太神の具と。御形。新宮小遷奉る事を。延曆儀。小載多。諸内人物。忌等及妻子等。人垣立。衣垣。思ひ辨ふる。し。笛おど。器吹。ならし。事ハ。繼體卷子。毛野臣オミの送葬の事を。其妻は。歌。子。比羅ヒラ。駈カ。馱タ。喻ユ。輔フ。曳エ。輔フ。枳キ。能ノ。朋ホ。樓ル。阿ア。符フ。美。能野。愷ケ。那ナ。能ノ。倭ワ。俱ク。吾ゴ。伊イ。輔フ。曳エ。輔フ。枳キ。能ノ。朋ホ。樓ル。と。え。喪葬令。凡。親王。一品。方相。輔車。各一具。鼓。一。百。



紀伊辨冉尊神避の條小。伊辨諾尊云々。陰取湯津爪櫛牽折其雄柱以爲乘炬而見之者云々とある。神代とゆは故事によれる御禮小めやあらむ。大寶の職員令も喪儀司正一人。掌凶事儀式及喪葬之具と云ふとも見えたるは上件の儀式を掌る官人を定置給へ依也。

又其山陵所小。荒垣を結めぐらし鳥居を立ち。帛幔ども扱かけね支。御輦車を其地も居奉り。御膳を供。即石構のうちも齋鎮め奉り。後御供人の中に。禊祓して歸る者め。留て仕奉依

者もあはせ聞えとゆ。

此段小云る。荒垣鳥居幔を設け。御膳を供ふる。かどは事。古書小徴かけきど。此等の事ハ。上代も後世も甚く違ふ。是れをいへらぬ。後代事をもて。猶古への趣を思ひ辨ふ。故今中右記。寛治七年十二月廿八日。小右記。永觀二年十二月廿七日。まこと左經記。長元九年四月廿二日。後送作法かどは大意を記せよ。其文いと長く煩し。被禊。古事記伊邪那美神の崩は條小。是以伊邪那岐大神詔。吾者到於

伊那志許米志許米岐穢國而在祁理故吾者爲  
御身之禊而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐  
原而禊祓也故於投棄御杖所成神名云々次於  
投棄御帶所成神名云々次於投棄御裳所成神  
名云々次於投棄御衣所成神名云々次於投棄  
御禪所成神名云々次於投棄御冠云々次於投  
棄左御手之手纏云々次於投棄右御手之手纏  
云々とこえ。伊邪那美命の神避るせる禍事  
を解除給ふと云起れる。上古に禮儀なきバ歷  
代の天皇等を始奉りて下り下まで行ひた

しもの形を爲し。故魏志倭人傳小已葬舉家詣  
水中澡浴以如練沐練沐とき彼周の禮は父母  
の喪十三月小して祭を行  
ふ事ある之を練といふ其祭は沐浴をる事  
ありて皇國の祓小や、似たるを以て云り也。伊勢神宮小ハ。今もこの禮ありと云也。さ  
て唐制小服制を定め給ひしと云。除服の時小  
祓禊也。家事を承ては。全く彼練沐に如く思  
え。衣を脱ぎと然らば。又諸國小葬終て後。その杖を  
と草履を脱捨す。家小歸ることあるも。古風に  
遺れるなり。古しへ人の意するて厚の也し  
故に。かく懇懃小葬に奉りて後め。其衣を棄

て還るよえ堪、さるをもて。近く仕奉りし臣等  
るよ舎人の類も。御陵所小侍宿に承例もあゆ  
し。形る憐し。其ハ万葉二。廿四 從山科御陵退散  
之時。額田王作歌。ハ隅知之。和期大王之恐也。  
御陵奉仕流山科乃鏡山爾夜者毛夜之盡晝者  
母日之盡哭耳呼泣乍在而哉百礮城乃大宮人  
者去別南まよと廿八 草壁皇子宫舎人等慟傷れ  
歌ふ。とそにみし。檀乃岡も君ませば常都御門  
跡侍宿爲鴨福の鳥け宮小も不飽ものも佐田乃  
岡邊爾侍宿爲爾往東の多藝れ御門爾雖伺昨

日も今日も召ことめおし。かどあは。是其證あ  
り。されどそは侍宿の期限た。いあばか。己あゆ  
まむ詳のあらぬも。試と考ふる小。御立えし。鳥  
まめ家と。住鳥も。荒びあ行そ。年替左右と云る  
如く。御葬りあ。己と後。一年がわぎ仕奉りて。さ  
て退散おるよやあらむ。

さてその山陵も。常葉れ樹を殖え。石文を樹る事  
かどめ。あは。甚後の世れ事あり。

墓よ木植るよとは。上代と己の事をゆし。小  
や。万葉卷三人が歌よ。かつあは。まよのてご

れぬ。たぐつきを。あゝやは聞ど。眞木葉哉。茂有  
良武松之根也。遠久寸。云々。卷九高橋連蟲の墓  
上之木枝靡有。云々。十九卷大伴家持の歌。後代の聞  
繼人も。いや遠小。志ぬび小せよと。黄楊小櫛之  
賀左志家良志。生而靡有。かどこゆ。猶あるはし。  
又續紀。慶雲三年丁巳。詔曰。氏々。祖墓及百姓  
宅邊栽樹爲林。并周二三十許步。不在禁限。日本  
後紀。延暦十八年三月丁巳。菅野朝臣眞道が奏  
言。己等先祖葛井船津三氏墓地。在河内。因丹  
比郡野中寺以南。名曰寺山。子孫相守。累世不侵。

而今樵夫成市。採伐冢樹。先祖幽魂。永失所歸。云  
云。日本紀略。康保四年六月九日丙寅。村上御陵  
可殖樹之由。被仰左右衛門。云々。ともこえとゆ。  
大も本墓の標。植る事ハ著々。墓を築成  
せる土の雨風。崩れやほま。其木は稍  
生繁。往くまゝ。根の蕃衍。土を堅固  
む。冢もたかれ。むれる。さる。庶人かどの墓  
も。いと微小。故。さる思慮もある。むをれど。  
天皇の山陵。山と云はる。大さ。昭き。標  
は樹植る事。な。ゆ。元明天皇の遺詔。小。

其地者皆殖常葉之樹。即立刻字之碑。と制給ひ  
き。凡上古きさら也。後々の天皇は陵子。碑文あ  
ゆ事ハあきを。此天皇小限して何事ハ。彼詔子  
とて也。されど數百年の後小至る。何きれ  
御世の御陵とめ決免がとく。疑える。事もあ  
めまバ。必碑まバ立給ふるまふと。ぞ思え。依  
因こよ云上代の山陵は詳あらざ。近  
るよく考へ明らめ。再興し給ふる。此天  
皇は制の如く碑文をも。其文は東大寺要録  
したる。ふる。事あ。か。し。  
第八雜事章裏書。大倭国添上郡平城之宮。馭宇八  
洲。太上天皇之陵。是其所也。養老五年。歲次辛酉。

冬十二月癸酉朔。十三日乙酉葬。この文本書は  
讀がとまを今ハ源弘賢のも。せ。る。西京金石  
文。ま。と。好古小録。は。據。考。正。し。あ。は。か。り。  
や。あ。は。る。碑高三尺許。廣二尺許。厚一尺許。とこ  
え。た。ゆ。さ。て。碑。ま。と。て。し。事。ハ。天智卷八年藤原  
内大臣薨とある註小。日本世記曰。中略碑曰春秋  
五十六而薨。ま。と。元祿四年小堀出。と。る。下野那  
須。因。造。碑。文。か。ど。あ。る。を。按。ふ。孝徳の御世頃  
小ぞ定め給ひた。を。む。喪葬令小。凡墓皆立碑。  
記。具。官。姓名。之。墓。この集解。釋云。假如職事官  
者。記。其。官。位。姓名。卿。之。墓。散位者。記。其。位。姓名。卿

之墓耳。按は内外諸司の執掌ある者を職事官といひ、無をぞ散官といふ例ときこゆ。とあてて。假令バ職事官を某官大納言中、正三位從某姓藤原源某實名卿之墓をかくを散官ハ。某官と云ふ省き記に事ゆか、れど官位をた人ハ碑を立ざ依ハ論をかきど。今の世小ハ庶民までも碑立る俗とあてられど。上件の例ハ據ゆ多。姓名之墓を記さるるべき事よこそ。又墓誌と云。石ハ文を彫て。官位姓名敘任生死ハ年月を記し。又其功業を記し附之。墓地ハ埋むる事も。漢國の風ハ仍アハるもれあ

きど頗る古たふやな也。誌文よと其餘のくは波夫理和謝考小い牙しき事どもめきるて御葬レの禮。大抵かくのさるる也。故に。死字穢と云る事也。神代をゆへに記さるる。後世の如くはとた事かく。喪小も日數の限也。あらざゆき。死字穢を云る事也。伊邪那岐大神の醜めき穢き因小坐け也と詔へるに起まゆ。されど仲哀天皇崩也坐也。いくちどれと神功皇后の重き御神わざ有しにても。後世に如くあらざ也。し事あられとゆ。然るを延喜の頃とゆ。死穢産穢



まゝ六畜死産の穢。甲乙穢。火乙穢。かどいふ事。  
式ヲとえ始て後々。陰陽師の説いとく行をき  
く。御祭れ式日。御祭せらるゝ事を稀あるま  
でふぞなゆきる。抑親おどる後きたらむ哀し  
さき。其月のそれ頃までせ。きたやのふ限の有  
る死にぞに有<sup>アラ</sup>ざ<sup>テ</sup>強<sup>ク</sup>限を立てゝ定む  
る事ハ。漢圀の制より。皇圀ふたぬ事也。凡親  
故思ふ心は浅のらむ子と。三年を待ど早くか  
かしさのはめぬるきふ。猶服を著て哀し死さ  
ま故もてつけ。又志深のらむは。三年過とゆと

も。哀しさき止。るきぬらぬ。釋<sup>ヌキ</sup>捨<sup>ステ</sup>てあご正形  
く志あさむは。共<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup>う<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>べの事あるを。皇<sup>ミコ</sup>圀<sup>ノ</sup>  
此服と云ふ空の。きたやのぬる限をたぬ。かか  
しさのまゝぬるよて。長くめ短くめ。こまご誠  
に哀しむよハ有る。服を著ざまぬも。哀きハ  
哀しく。きてめ哀しからぬ。かぬこのらぬバ。  
いとぬら事也。されど彼圀ふても。周の宰予と  
いふる男と。三年に喪。一年にせざとけむと  
論ひ。周の云々。已下廿六字。原書ハ。漢の文帝  
云云。王と。こよかく服をちと来た正しを。儒

者も。とからぬ事小もぞたいへどめ。理ある事  
ぞかし。さてあく云ハ。服といふ事此有無の本  
此論小こそあまき。既よ其御制のあるう  
ずも固く守めて犯ままごき物ぞある上件の  
文ハ。本居氏此玉葛間小記されたる趣も甚く  
つゞめて  
とれる也。

然るも文武天皇の御世よ。から因此制小因も。思  
服と云事を定め給ふゆ。其思と云も。親よまれ。親  
屬小るも。身死とる時。家人の忌慎みも。居る間も  
云ふ事小。朝廷よ仕奉る人小ハ。其親疎よ依も。  
日數も定め給ひ。其日數の間御暇も賜ふあり。又  
服と云ハ。これめ其血脈此親と疎と小。日數の定

あゆも。其間も鈍色よ染ある布此衣を服て。甘き  
味物も食ひ。美しき衣も著依心もあき。人情も本  
空して此御制あり。

忌と云事ハ。古書小正しく見あたら糸ど。假寧  
令子。凡聞喪。舉哀。其假減半云々。凡給喪假云々。  
凡改葬一年。服給假二十日云々。空ひる假即ち  
是小て。喪よ遭る人子。なげきれさむるも。官  
仕へ此暇給え依事あり。其暇の間も。家小忌  
こも依とゆうつと。忌と云事ハ。あはし。形  
系。傍し。東因通鑑宋の雍熙二年此條下小。高麗  
の定めとる五服給暇式と云も。舉て。斬

衰齊衰三年給百日。齊衰期年給三十日。大功九月給二十日。小功五月給十五日。緦麻三月給七日。日とあるハ忌服の制ニ似トシ、日數のいさハ違ヘるハ代々の制度ニ沿革ス。其意小異なるカ也。凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵。この義解小。錫紵者細布。卽用淺墨染也。中右記。大治四年七月七日。小。今夜新院著錫紵云々。御裝束色如凡人重服也。凡玉海。建久三年三月。後。十九日。主上。後鳥羽。避正殿。御于倚廬也。云々。宗賴朝臣持參御裝束。布。黑腋御袍云々。鈍色御袍。ま。四月二日癸卯云々。單柑子色大口云々。

頭中將持參錫紵御裝束云々。黑御直衣。鈍色。二御衣。柑子色御袴等也。ある。淺墨染。又黑染。共。鼠色カ。事著ク。如凡人重服。と云時ハ。凡人も父母の喪。鼠色カ。服著ト。事ハ。推考。又其親疎小依。色。濃淺。ある。事ハ。源氏物語。此書確證トハ。ある。た。の。あれど。出。此。小。引。小。葵。み。う。せ。た。る。事。を。云。て。に。尤。め。る。御。ぞ。た。て。る。つ。き。る。も。夢。ハ。心。し。て。に。れ。さ。き。だ。ハ。ほ。し。の。バ。ふ。か。く。そ。め。給。は。ま。し。と。あ。が。に。さ。牙。源氏の。あり。の。だ。ゆ。あ。き。だ。う。に。墨。衣。あ。

さきれど。涙ぞ袖ま。ふちとねしけ。本妻三月  
 色薄々まど。涙ぞ深まをふちとねし。又せ  
 藤衣のふちよ假正用ひしねるる。又せ  
 正己死て。らうたう志給ひし。ちいさき童の。葵  
 と正己き思ひし童あり。おや共もか。いと心がそげし思  
 牙。こせ己ゆふみ給て。源氏あてき。あてき  
 名今我まおそ思ふるま。人かめれとの給へ。ハ。  
 いみじくか。程かきあこめ人とゆき黒く染  
 ず。黒支のげし。ぐたさういろたのまねどきた  
 冢もかかし。こハ本主の爲。墨深字著る由  
 後拾遺集。平教成。うにくお。衣れ色ま。か

けれどめ。おれど涙の。か。藤袖のね。とある小  
 て知るぼし。さて其色小種々れ差あ冢の如く  
 なまど。吉部秘訓抄。文治四三二同記。云。心喪  
 色有輕重。鼠色。鈍色。諒闇之時。又練色。淺黃等。同  
 以通用。歟。とこえとるハ。み形鈍色ま少しだ。  
 替。染とる物小。ま。夫べてる藤衣と云し。か。藤  
 る。万葉三。須摩の海。人れ。塩。や。き。衣。の。藤。衣。  
 荒木田久老の考。藤衣。多。藤。も。て。織。と。る。布。小  
 て。今。も。田。舎。の。ハ。あ。正。卷。十。二。小。大。王。の。塩。焼。あ  
 ま。れ。藤。衣。か。れ。ハ。あ。ぬ。と。も。彌。希。將。見。毛。と。と。え  
 と。ゆ。古。今。集。ま。れ。ま。の。何。る。の。塩。焼。衣。を。さ。ま。あ  
 藤衣の間遠とつ。き。や。君。が。來。ま。さ。ぬ。と。ある。小。ま。あ

。葬禮私考

。五十

いへるきさる事なるる思たる小付て按  
ふよ喪服を藤衣と云も布まゝ麻あどの鹿き  
故の名あるる。斯く中古までには藤衣は著  
たる人と雖も暇れ日數ど小過ぬまば内裡  
も又官廳へも參入事おし後々も父母の  
喪小も除服と云事を命せて右の服を著る事  
は除させらるゝ事とかれは故も今も公家さ  
ると云へどめ喪服おら出歩行ふとはあ  
況下ざるも服を著る事おら絶て其服  
といふ名目は義理さへ小。今の人を知らざ  
依如く成小とゆ。さて忌服の制も公儀の服忌  
令まゝて今の制度を慎と守

るべ  
き也

大凡かく世の風俗を厚くし民は心を樸實スナホ小し  
給ふ大御政は有るまど。持統天皇の御葬ハヅリ。折と  
く柴シバ煙ケを揚アゲさせ給ひしとゆ。御世々々も。そ  
の御葬を薄カくし。費ツヒは省ハツくをのみ。まゝおた事に  
思しおるの根本モト小く。終り其禮儀レイギもか小め。專ムネと  
僧徒カミナガ等の掌る事は如トかりおる。おれ土師連ハニシの仕  
奉る職シヨクをめ。や米給するに依ヨる。上代カムツヨの禮儀レイギハ。自  
ら衰へよとゆ。故中頃ナカゴロとゆ。又忌穢イミケレと云事をや  
て唱ナカるて。いみじき風俗フウソクの害とおもゆるも多

荷前ノサキの使も絶え。世々此山陵も荒廢給る事ハ。い  
中ナゲカ歎息し死ねさあらばや。志のなきあきど。何事め  
古しへの大みそぶ正を。再興し給ふ時運ミヨノサマあるま  
合せむ思奉る小。この御ミを。再興し給ふ時運ミヨノサマあるま  
るに立あへるは。支時サキトキにあらざれば米やも。

大凡古しるは御崩給ふ事。神上とも。神避とも  
申し。殯宮カムミヤを神宮カムミヤといひ。御葬カムハフリは神葬カムハフリをいひ。申し  
て。いとく。嚴重オコソカに仕へ奉る事。正し故に。天  
皇命に大御葬オホミマツルに穢ケガレき僧徒ソウトおぼれ預ヨク正奉る例  
なき事コトおぼれ。持統天皇の火葬ヒマツルせさせ給ふ

時小。かつくは。その事あ正そ免於らむ事。聖  
武天皇崩御して。御葬之儀。如奉佛とある時と  
正タテマテ専センと僧徒ソウトに掌る御禮儀の如くありし。形る  
るルに。かゝる御世々々。小遺詔し給ひ。尊骸オホミタに  
火ヒをさして。御骨ミカネは。野山に散し奉る。山陵ミカ  
を勿作ナツ正タテマテる。葬司ハフソツカを勿任ナし。形ど。甚忌イトユ々しき  
ま。と。被勅ヒキトクふ例を正し故に。垂仁天皇の御世と  
正タテマテ仕奉正し土師氏も。光仁天皇の御時。小菅原  
姓を賜ひ。延暦のたどに。大枝朝臣オホエノミを。して其  
殯宮アヅキノミヤの御膳ミク誅人長及年終奉幣。諸陵使者モツカヒかど

ち。と形所司故擇び充る制せられしとゆ。古  
の禮儀尤悉く衰微たゆ。かゝりし世のさるあ  
はる合せ多。既小め云る如く。穢を云事を言痛  
いひさじぎおるとゆ。觸穢又障あど云小託言  
て。山陵の御使多さ牙斷正て。仕奉らぬ徒も出  
來小け正。故終不奉幣の使も絶え。往來人も稀  
か正しおれば。掛卷め畏支山陵所も。盜賊小發の  
き。或る兵火不かゝり給ひ。御在所何故其  
処を知られぬさ。いと多の依。さてかゝさ  
ま小。朝廷の御禮さら廢きとゆ。故子。下々の

民どもも。佛を拜と染紙をとむまのみ。葬禮と  
い思ひためる故。諸国の神社に仕ふる。禰宜祝  
部等れ葬儀も。加那ら古風に遺まるめ有  
那ら米ど。中世に亂小其傳へを失ひ。儒佛の禮  
をせ正雜と造れ。類もある多。實小古と正れ  
禮儀ぞと思居依輩も。あふ。甚かとはら痛  
死おざな正かし。凡そ世に生とし生る人誰  
の喪多かれし。父母多敬ふ心あ。あ。れ。父  
母を敬ひ。妻子多憐む心あ。者。喪。を。盡。し。  
葬小誠多致。に。多。神代とゆ。風俗よ。して。人  
人たる道小。ぞ有。多。然るを。某の。國造。を。父。死  
依。時。常。の。如。く。膳。多。供。至。ゆ。火。繼。の。祭。と。云。願  
る。事。も。な。く。大。庭。の。社。に。至。ゆ。火。繼。の。祭。と。云。願

○葬禮私考

○五十三

行ひ祭終ゆぬと家入て告來る時其遺骸を葬所  
 小送ゆ子加即家小入て酒のみ宴遊を事也  
 とぞ熾橋加く思ふ事甚じた謬あり其世と  
 ち死穢多思嫌ふべき事おむ故に神小仕中  
 避るバせざりけむ惡風俗とあむ兄弟の喪を  
 思えるるれバあゆさて又神官の葬儀を志む  
 也書まづ位牌もて位牌小造る由あるめ大誤  
 小置く事とあれ今彼と牌を周制の神主と化  
 思へるれど今彼の位牌も周制の神主と化  
 るものあれど今彼の位牌も周制の神主と化  
 國の物もあれど今彼の位牌も周制の神主と化  
 禮記の玉藻有指畫於君前用笏造受命於君  
 前則書於笏又上代ハ墓祭るが位牌とに禮  
 故小さらば物字設置事おどハ無にの禮あつ

のかどみう其を用ふる事とあは空位を拜む  
 母ハ神位をこ朝夕は崇奉るは空位を拜む  
 小ハ神位をこ朝夕は崇奉るは空位を拜む  
 己ハ神位をこ朝夕は崇奉るは空位を拜む  
 神象とて拜と仕ふるも情を本小て木主を  
 今め其制して拜と仕ふるも情を本小て木主を  
 何ら其制して拜と仕ふるも情を本小て木主を  
 を穿ちて神靈の往來通路とせらるが如き穴  
 とた理をもあらぬど笑ふ國人の癡かれば難  
 信まにあらぬど笑ふ國人の癡かれば難  
 志の依り時來ぬれや千歳ある習染とる  
 火葬の御わざ。後光明天皇ハ御世小止らせ  
 給ひ。中世とゆ以降荒はてし山陵をぞ今上  
 皇帝の詔命小依り修復しめ給ふ。直ぐ正し



き大御政のさる故推量に奉る小。此波夫理の儀め。かから又古へは趣を熟考す明らめ。現今小施にるき儀式を定免坐す。下が下まで行ふ。信く制給ひ。あは印度の寂滅に教をきとく絶ち去て。皇御國の君を尊み。父母を敬ひ。兄弟を忘たし。み。妻子を恵る。朋友を睦む。風俗。故。厚くものゝ給ふるき事小あむあはと巻流。

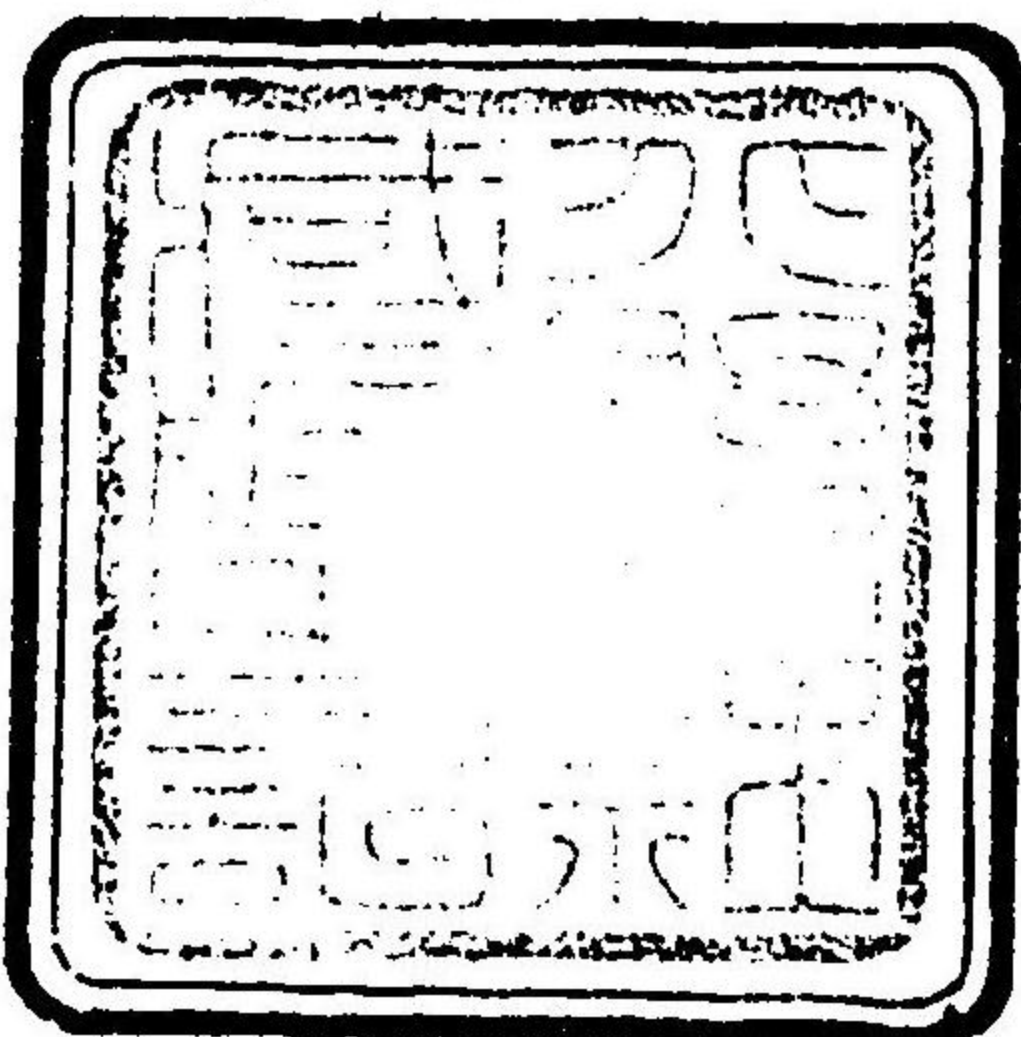
慶應二年丙寅九月二十六日稿成

葬禮私考畢

明治九年七月十二日出版願  
全年七月三十一日版權免許

定價三十五錢

北野神社藏版



西京三條通堀町西入

出雲寺文治郎

同 寺町通御池下ル

佐々木惣四郎

製本所

同 寺町通佛光寺下ル

梅村伊兵衛

